サプタリシ：バガヴァーン・ニッテャーナンダの物語

イーシャ・サーデサイによる再話

インドでは、夜空はサプタリシによって照らされると言われています。サプタリシとは、その教えが何千年も崇敬され、神聖な霊感を通して教典の知識を受け取り、そしてその知識を他の人々に伝えることをその生涯の仕事とした7人の賢人たちのことです。それらの賢人たちのそれぞれ――カシュヤパ、アトゥリ、バラドゥヴァージャ、ヴィシュヴァーミトゥラ、ガウタマ、ジャマダグニ、ヴァシシュタ――には天に一つずつ星があります。それら七つの星が一つになって、星座サプタリシ――西洋では北斗七星として知られる星座――を形成しています。

インドの多くの人々は、それら7人の賢人たちのためにプージャーを行います。習慣として、この崇拝はシュラーヴァナの月――通常は8月に一致する月――に行います。しかし、それを個人的な儀式として、一年を通してこのプージャーをする人もいます。

1950 年代にムンバイに住んでいた、ある一人の女性、いわゆるアンマの場合がそうでした。毎月の満月の夜、彼女は7個のビンロウの実を祭壇に置きます。それぞれが一人の賢人を表していました。火と香をともし、繊細な煙がらせん状に立ち上る時、彼女はプージャーを行うのでした。

たまたま、このアンマはタンサ渓谷のガネーシュプリーの村に住んでいた生きている師、偉大なシッダ・グルの信奉者でした。彼女はバガヴァーン・ニッテャーナンダの信奉者だったのです。

ある年の夏、このアンマはガネーシュプリーへ、バデ・バーバのダルシャンを受けるために旅をしました。彼女の計画は、数日間滞在し、満月の日に家に戻り、そうすればサプタリシの規則的なプージャーができるというものでした。

満月の日を迎えた時、アンマは帰る前にバデ・バーバに会いに行ってダルシャンを受けようと準備をしました。バデ・バーバのために新しく建てられ、彼がそこでダルシャンを与えていた住まいであるカイラス・ニヴァースに向かう狭い道を、彼女は歩いて行きました。村は静かでした。当時、そこにあったのは数戸ほどの家がぽつんぽつんと、そして一つの店——村の外から訪れる人々の役に立つためにバデ・バーバの指示を受けた信奉者たちが開いた食料雑貨店——のみでした。

アンマがカイラス・ニヴァースの近くまで来てそのアーチと丸屋根が見えてくると、扉はまだ開かれていないことが分かりました。そこで彼女は外に座って待つことにしました。辺りには他に数人がうろうろしており、彼らの多くもダルシャンを待っていました。

10 分が過ぎました。20 分。1時間、2時間、そして不意に、午後になろうとしていました。夏の太陽は真上にあり、明るく白い球体が空の青にぼやけていました。アンマは次第に心配になってきました。一方では、もし早く家に帰らなければ、彼女はサプタリシのプージャーをその間に行う必要のある特定の時間のムフールタには間に合いません。そして彼女はこのプージャーを行わなければなりませんでした。それは彼女が固く誓っていた規律にのっとった修行でした。それは7人の賢人を喜ばせ、彼らの祝福を受け取る彼女の方法でした。

しかし——彼女は彼女のグル、バデ・バーバに会うために、ここガネーシュプリーにいました。バデ・バーバのダルシャンを受けることなく、自分が出発することを知らせることなく、そのための彼の許しを得ることなしに村を離れることは、彼女にはできませんでした。

アンマはこの状況に困惑している中、わずか向こうにある温泉を見ました。温泉は複数の長方形の浴槽に注がれていて、そこからはゆらゆらと湯気が立ち上っていました。毎朝3時ごろ、バデ・バーバはそれらの浴槽で沐浴（もくよく）をしました。そして一日を通して、人々はバデ・バーバのダルシャンのためにやって来ると、彼らもしばしば沐浴しました。グルに近づく前に自分自身を清潔にするためです。

待っている間に手短に沐浴しようと考えて、アンマは腰を掛けている所から立ち上がり、温泉に向かって歩いて行きました。その日はとても暑かったので、辺りには誰もいませんでした。温泉には彼女一人だけでした。サリーのひだを手にまとめて、温泉に足を入れました。

彼女が沐浴を楽しんでいる時――湯が腰まで届き、彼女の周りで優しく渦を巻いている時――どこか近くから音が聞こえました。実際には複数の音でした。陽気な叫び声や、小さな足のパタパタする音。彼女が周りを見渡すと、驚いたことに、少年の一団が温泉の端に立っているのが見えました。1、2、―― 合計で7人いて、彼らはせいぜい5，6歳でした。

彼女が何か言おうとする前に、彼らは温泉に飛び込んで遊び始めました。彼らは湯を掛け合い、彼女にも掛けました。彼らは浴槽中ではしゃぎ回ったのです。

「あなたたち、どうか私が沐浴している間は邪魔をしないでちょうだい」と、彼女は優しくも断固とした声で言いました。

それから少しして、アンマは温泉から上がりました。乾いた服に着替え、カイラス・ニヴァースに戻りました。その時には、すでに午後になっていました。

建物に近づくと、そこには確かな何かが空気中にありました。注目と期待の感覚です。人々は列を作り、準備を整えていました。

そして――カイラス・ニヴァースの扉が開きました。係の人が、ダルシャンのために人々を中へと案内し始めました。バデ・バーバは、入ってすぐの所に腰掛けていました。

アンマのダルシャンの順番が回ってくると、彼女はバデ・バーバの前に歩み出ました。彼の姿は黒色に輝き、表現し難くも彼の周りには極めて頻繁に感じられるあの特質――平安――をまさに大気の粒子に浸透させている彼の存在は、常に鮮やかにそこにありました。彼女はプラナームにひざまずきました。

すると、バデ・バーバが彼女に言いました。

「で、おまえはサプタリシのダルシャンを受けたかい？」

アンマは、驚いた表情で顔を上げました。インドでは、人のヴリタ、つまり儀式は、崇拝している神のダルシャンを受け取った時に実を結ぶと言います。アンマは、あの7人の少年たちを思い出しました。彼女はバデ・バーバを見詰めました。

彼女の心の中で、マインドの中で、あるいは恐らくどこか無限の輝く空間の中で、彼の言葉が響き渡りました。

「で、おまえはサプタリシのダルシャンを受けたかい？」

© 2019 SYDA Foundation®.著作権所有。